

環境を見つめ直す

— 保育者のイメージが

生かされた園舎建築を通して —

永井 三亮

はじめに

園舎の老朽化及び三歳児学級の増設による手狭さから、園舎の改築が実現し、この五月で満三年目を迎えた。そして、園舎完成後も施設設備等の追加や改善など環境整備を行ってきた。

本園の百二十年の歴史と伝統を引き継ぎながら、現在及び近い将来の子どもたちの実態にも対応できる環境を作りたい。その中心になる園舎建築。子どもたちの活動を誘発し、保育者にも使いやすい園舎にしたいなどと真剣に考えた保育者たちであった。

保育者が、約九十人の子どもの姿や動きをイメージ



▲緑につつまれた園舎園庭

しながら、部屋の配置や園舎の作りを考え、壁材や床材の検討、デザインや色彩に至るまで子どもを中心に据えて作った園舎である。新園舎は、予算や建築基準、工法などの制約があったとはいえ、満足度の高い仕上がりになったと思っている。

また、園全体では、園児が園舎と園庭とをしぜんな形で一体的に活用できるように園児の動線に配慮しながら、樹木の移植や植栽、固定遊具等の配置を行うなど、全ての面で一人一人の保育者が納得のいくまで議論しながら作ったこだわりの環境ともいえるものである。園舎はもちろんのこと、園庭も、旧園舎跡の整地及びかさ上げなどほぼ全面整備に近い状態であった。そこで、必然的に幼児教育の必要性や重要性、本園の使命や存在意義を改めて問い直し、環境を見つめ直すということにもなった。園舎改築という貴重な体験を元にして、本園の保育や環境についての取り組みの一端について述べてみたい。

本園の概要

明治十二年四月に創立、今年、百二十周年を迎えている。鹿児島市の中心部に位置し、教育学部、附属小学校、附属中学校に隣接し、教育実習や保育研究での連携が取りやすい。

園児は、三歳児二十人、四歳児三十四人、五歳児三十三人、計八十七人在籍。ほぼ市内全域から通園し、一般的に同年齢の子と遊ぶ機会は少なく、地域性に乏しい。また、自然体験も少ない傾向にあるが、素直で明るく意欲的に活動する子が多い。

園舎の概要

新園舎は、隣接の敷地を確保し、平成七年十月工事に着工、保育者の希望が設計段階から考慮され、子どもの生活が重視された園舎として翌年六月に完成した。完成と同時に移転し、新園舎での保育を開始。園庭の整備や水遊び場の新設、カーテン、ブラインドな

どの施設設備の整備

を行い、平成九年二

月一日に落成記念式

典を行った。

述べ床面積六九九

平方メートル、建築

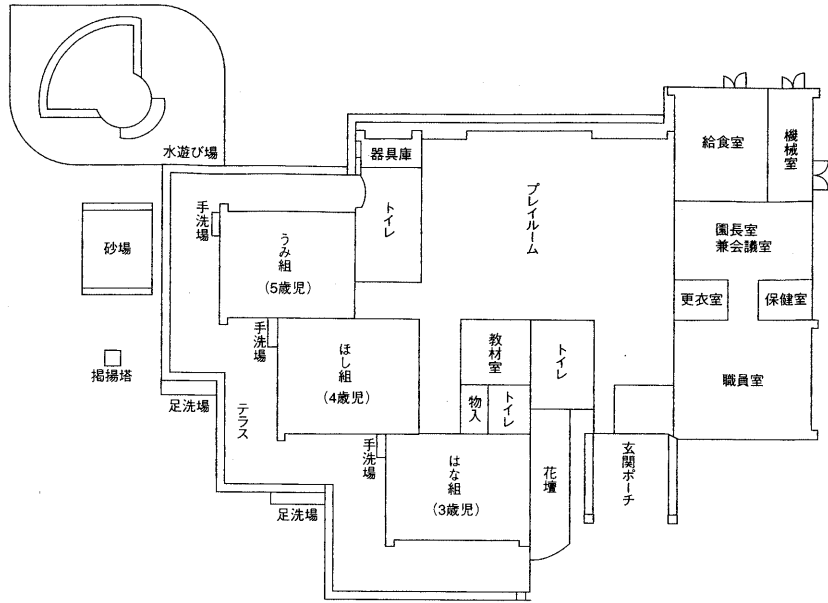
面積八七〇平方メートル、テラス一七二平方メートル、保育室（天井高三メートル）、六三平方メートル、プレイルーム（天井高五メートル）一八四平方メートル、給食厨房四〇平方メートル、保健室九平方メートル、更衣室八平方メートル、職員室五六平方メートル、園庭四千三百三十平方メートルなど園舎園庭とも、以前に比べ倍近い広さになった。

園舎改築に当たって

1 園舎建築の基本的な考え方

暖かい温もり感、教育の場にふさわしい落ち着いた雰囲気、明るく、広々とし、解放感に満ちていながら





▲園舎平面図

も、園庭と一体化した機能的な園舎、各室各設備の機能的な配置、温かさを感じさせる色彩や材質、周辺環境と調和した外観などを重視。

2 連続性と異年齢交流を配慮した配置

保育室から園庭への出入りがしやすいように各保育室には、広い出入口を二カ所設けた。保育室と園庭との連続性を考慮したテラスは、段差をおさえ（安全面も配慮）、しかも広く取り、雨の日でも遊びのスペースが十分に確保できる。三つの保育室は、異年齢間の園児の交流も育めるよう、隣室が見える段違いの配置になっている（園舎平面図参照）。

3 生活拠点としての解放的な保育室

全体的に柔らかな色調、落ち着いた雰囲気のある室内、温かみのある木目調の壁面。採光と換気を兼ねた省エネ設計のトップライトからは、直射日光も差し込む。天井を高くし、ガラス面を広く取り、明るさと解放感を高めた保育室は、園生活の拠点として安定感のある落ち着いた雰囲気になるように配慮した。

4 交流を育む開放的なプレイルーム

各保育室から出入りしやすい、オープンスペースのプレイルームは、異年齢の交流がしぜんと生まれ、園児同士のふれ合いが広がる魅力的な空間になるよう園舎の中心に配置した。

遮光ブラインド、可動間仕切り、可搬型組立ステージ、ステージ幕等により、園児の遊びの場にとどまらず、各種行事や集いの場ともなる多目的で多様な使い方ができるようにしてある。建設途中に無理を言っただけでもらったのが可動間仕切りであったが、そのお陰でプレイルームの利用範囲が、格段に広がったことを付け加えておきたい。

5 安全性や快適性、情報化への配慮

交通量の多い公道側には、職員室や給食厨房等の管理部門を配置。床面は、弾力性のある体育館仕様とし、ガラスは、割れにくい安全な材質のもの、ドアは、手を挟みにくい構造のもの、玄関自動ドアには、衝突防止用遮光スクリーンを張り安全性を確保した。

各室とも保育者が健康を意識しながら保育ができる

ように空調装置を設置し、部屋毎に室温管理が出来るとともに、桜島の降灰時にも快適な保育環境が確保出来るようになってきている。OHP用スクリーンや大型スクリーン、テレビ共聴システムなどの視聴覚機器、さらに、将来のマルチメディアも意識した保育室への電話回線設置、インターネット利用の構内ラン用端子の設置など、高度情報化社会への対応も配慮した施設になっている。

6 その他

園庭の畑で育てた野菜などを園児が収穫・調理し、食べるという一連の連続した活動を重視し、給食厨房のスペースは、園児の活動を前提に広く確保されている。

園庭中央には、園児の未来像を象徴するものとして楠の太木を移植し、また、玄関前には、保育者の園児観を象徴するものとしてカラーブロックで双葉の形をかたどり、期待する未来像と園児像とを視覚に訴えな



▲明るく解放的な保育室

がら本園の保育姿勢や考え方を出来る限り分かりやすく表現しようと試みた。

また、砂場と飼育舎を新たに増設したほか、木製遊具、多目的な遊び空間としての水遊び場も付帯設備として作ってもらった。

足洗い場は、基礎工事の段階で、保育室の保育者から死角になるような配置になることが分かり、急ぎよ向きを変えてもらった。終始、ユーザーが使いやすい建物を作りたいという学内における建築担当者及び業者の誠意ある対応のお陰で保育者の納得のいく仕上がりになったと思う。

目指す環境

保育者のイメージを大切にしながら数々の特徴を持たせた園舎も単独には機能し得ず、園全体の環境が調和して初めて生きてくるもの思いから、今後とも次のような願いを込めた環境作りをしたいと考えている。

1 幼児期にふさわしい生活がおくれる環境

（期待感が持てる魅力ある空間、園児の視線・動線等が配慮されている空間）

2 園児が明るくのびのびと自分を発揮し、新たな自分を見出していけるような環境

（自分探し、自分作りが集団の中で配慮されている空間）

3 何かをしたくなるような、園児の気持ちや興味関心が誘発されるような環境

（明るい雰囲気、解放感、発見の喜び、自然の恵みとの遭遇、遊びのきっかけ等が配慮されている空間）

4 園児が落ち着いた雰囲気ですぐに工夫しながら楽しく生活できるような環境

（安定感、集中力、想像力、思考の芽生え、表現力の練り合い等が配慮されている空間）

5 生活の中で数多くのことが調和よく体験できるような環境



▲園生活と家庭生活とを結ぶ玄関

（生活している生きていくことの実感、毎日が楽しく更に楽しくすることへの工夫、生きる力を育む豊かな体験が配慮されている空間）

6 四季折々の季節を感じ、動植物とのふれ合いを通して豊かな心が育まれる環境

（生活の中での豊かな自然体験、感動体験、優しさ、思いやりなどの心の訓練が配慮されている空間）

このような環境が、ある程度実現できたとすれば、それを基盤にした保育者との関係や保育者の意図した環境構成とそれに基づく適切な援助が、理想的な形で日々の保育に生きて働くのではないかと考えている。

おわりに

子どもの成長を促し援助するための園舎を作りたいと日々の保育実践をふまえながら保育者がこだわりを持って作った園舎。園舎の特徴を生かし、一体感があ

るように整備しつつある園庭。それらを基盤として更に理想を求めて繰り返される保育実践と環境の見直し。

チョウ、バッタなどの昆虫や野鳥を呼び寄せる樹木や草花、四季折々に花や実を付ける木々の計画的な植栽、園の生活の中で豊かな自然体験が出来るような環境にしていきたいなど、思いは膨らむばかりである。

環境は生きている。子どもたちとの関係で常に状況を見極めながら、見直していく努力が必要になってくる。子どもを見つめる確かな眼と分析力、適切な環境構成力、適時な援助能力など、保育者としての力量を高めながら、子どもの輝く瞳を求め、先に述べた目指す環境の実現に向け、みんなで工夫していきたい。

（鹿児島大学教育学部附属幼稚園）